

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成21(2009)年
5月号

通巻 465号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

発行日 平成21年5月23日
発行所 大倭出版局
〒631 0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44 0015
印刷 大倭印刷製
定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
振替口座 01050 6 67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



武甲山(埼玉県秩父市) 林 修三さん撮影(関連記事・4頁)

対談

昭和30(1955)年7月1日発行 第14号『大倭』より

神示
独善、排他の思想は邪道なり。
邪道は己の心がつくる。これ
調和の敵、神意に逆らう。

なもたかまのぼろ
奈母太加天腹 拍手合掌

信仰の心構え

法主 矢追 日聖
(満43歳)

永年の間、世の悩める人、或いは迷える者等の指導強化に当たり、最近各地に出向いて色々の相談を受けている。その間、常に思うことだが「信仰とは何ぞや」といったことについて、余りにも無知なようであるから、これではかえって信仰することによって悩みを増すような結果になりはせぬかとの老婆心から、ここにこの問題を取り上げることにした。

無分別に入信の動機をつくる

よく聞くことだが「自分は神様に手を合わせるような悪いことをしたおぼえがない……」とか、「なほ適わぬ時の神のみ」とか言っている。これ等の人々の信仰に対する心構えは、一般社会の代表的なものとして見られるところでもある。

前者の場合は、何か罪を犯した者が神にその罪を詫び懺悔するのが信仰だと考えていることになり、その裏には、自分は正しく世渡りをしてい

から、もし神があるならば信仰せずとも守つてくれるものなりとの意味が多分に含まれている。後者の適わぬ時の神だのみは、信仰に入っている人々の誰もが一応は経験していることで、これが利益信仰の根幹として誰もが心の奥深くに包蔵している神への依頼心であり人間性の弱さでもある。

大倭を訪れる人の多くは、今日まで一度も神様や仏様に手を合わせたことがないという型のものである。このことは、現在として珍現象に属するものではないが、しかしこれ等の人達は何を以って入信の動機をつくられたか。申すまでもなく、事業は今までのように順調にはいかない、次々と病人が出来てくる、物心両面に亘って行き詰まりの色彩がいよいよ濃厚になった時、誰かから「あそこの神様はよう見てくれる。よう当たる。騙されたと行って行きなさい」と誘われると、はや事の前後も考えずに盲目的に突進して行く。

大体これに似たような経路を辿って訪れて来る者がその大部分と言える。中には又相當に社会常識もあり多くの人を使っているような、或いは理性の勝っている人であっても、こうした入信の動機が、略々同じであることは、現在の社会不況が生んだ副産物でもある。

一時の信仰よりも永久の信仰に生きる

花火線香のような信仰は止した方がよい。

或る会場で、永患いの病人を持つ信人がこんな話をしていた。それは「或る宗教の先生が、「この病氣は必ず治してやる。うちの信者になれば即座に治る」と、毎日のように詰めて来る。いくら断わつても来る。或る日のこと私が留守の間に、家内がその熱心さとねばりにとうとう負けた

のか入信を約束した。私が家に帰ると、お社は庭で潰されているし仏壇は無くなっている始末。ただ、あきれて家内を叱る勇氣も出なかった」と。

又、或る教官の奥さんは次のように語られた。「主人は、私の信仰の自由を認めています。もう五歳になるこの子供が、ここ数年の間毎日引きつけの発作があり、勿論言葉も分からず歩行も出ず、終日この子に掛かり果てております。或る方の薦めて信仰の道に入りましたところ、その宗教の先生は「それは、あなたの家の因縁で、先祖様の供養が足りない。それで先祖を供養すると共に、その因縁消滅の修行をして、あなたの手で信者を作らなければ助からない」とのお指図がありましたので、それから暑い夏の日も寒い冬の日も肩で引きつけている子供を負って、一軒一軒この子供を見せ懺悔して因縁消滅の修行に回りました。けれど子供は悪化の一途を辿るのみでした」と。

現在広まりつつある大教団の末端が、こうした方法によって信者獲得に専念している現実は見逃すことは出来ない。けれどその反面、一般の人々の信仰に対する心構えがはつきりしていない為に、あとで騙されたのインチキ宗教だの言ったところで、それはあとの祭り。要はそうした信仰に導かれるところに、自分自身にもそうしたものを受け入れる下心があり、利益を求めていたからだという反省を持つてほしい。

信仰は心の羅針盤

自分が信仰している神様、或いは宗教が唯一絶対として、その他の宗教の悪口を言う。こんな一方に偏する信仰は、眞の信仰の心ではない。盲目的に又花火線香のように、他を退けても自分の信するものが最も第一だなんて逆上せるような貧し

き心の持ち主は、もし仮に信仰によって求めているその結果が、逆に顕われた時は何とするか。治ると思つて信仰したが死んでしまったとか、信仰してから家の経済が悪くなったとか、こうなれば一応は悲惨の淵に突き落とされるのではあるが、ここはこれで縁切りと簡単にさよならを告げて、さらに自分の求める目的に適つと言われる宗教に入信する。

転々と渡り歩く中に偶然にも我意に適つた時、その宗教は唯一のものとしてその人の心に宿る。數医者の功名の類である。けれども、それは長続きするはずがないのだが。

活眼を開いて世間を眺める時、現在は宗教の勃興期の様相を示しているが、実はその信仰に導く根本の原因は、暮らしていくに尖鋭化した人心等に満ちた現社会の実情にあることをよくよく認識しなければならぬ。信仰の動機がここにあるとすれば、ただ信仰し神仏の力によってこの信仰目的の完遂を念ずるの愚なることは、国を挙げて戦勝祈願を行ったにもかかわらず敗戦となつた結果によつて、神は如実に教えているではないか。

信仰はあくまでも心の糧であり、人生行路の羅針盤でなければならぬ。(昭和30年6月23日記)

再録

同年11月1日 第18号『大倭』より

法主様より聞く

靈動のおはなし(一)

神経運動と精神統一

自然に手は振るものですかね。

大倭の祭典の時に、参詣者の中に時々無心に、

合掌した手を振っている方を見受けることがありますが、あれは自然に動くものか、それとも知って動かしているものか、この点が、どうも解せないところですね。この真相を何とか知りたいと思えます。

法主 今月、布施の葦原申孝会の教導に参りました時、襖を昔のようにしてほしいという会長さんからの希望がありました。

襖をすると霊動を起こす者も多く出るのですがね。どうも日本人の伝統因習と言いますか、手でも動き出すと簡単に「神さんが降ってきた」とか「お陰をもらった」とか、くだらんことを言っておだててくれるので、すぐ偉くなったつもりで逆上する欠点がある。

こうなるとね、自分は神の使いだ、聞きたいことは何でも伺え、一同サガラーといった高慢振りを発揮する。これでは宗教性はなくなるし、大衆を迷わす罪業の方が大きくなるので、即答はちょっと考えた。

手を振ることですがねえ……。大抵の人は出来ると思う。特に女性はその肉体の構造や組織が受け身になっているので、体内を通っている神経も誠に微妙な感受性に富んでいるので、統計的に見て男の方より女の方が霊動する率が多いようだ。

こう言えば叱られるかもしれないが、女性は男の味を知るとか、或いは性に目ざめるとか肉体に変化をみるようになるかと感受性が強くなると案外、理性が乏しくなる人が多い。一面こうした影響も手伝うのか、とかく霊動する者が多い訳である。それであるだけに狂気に刃物を持たせたと同じ結果を生ずる場合がある。

手が振ってくるのは自然で、故意にやっているのではない。これは一種の神経運動なんだ。始め

は一応恐怖を感じるのであるが、その霊動の根本義を知られば喜んで続けられる。さらに真面目に続けて行けば、所謂精神統一、即ち入神の境地に達するのである。

この入神は宗教として最も必要であるが、その第一条件は、純真な邪念のない精神を持つことである。それ故に先ず精神の修養から始め、以って入神にまで進んで行けば、理知を超越した真の悟りの境地に達することが出来るのである。

もしそうした精神的な基礎のない人が、仮に霊動したとすれば、すぐに神秘的な感を起こし好奇心に駆られるのであるが、こうした経路を踏む人が、今流行の「おがみ屋」か宗教企業家に、または教祖にと進転して行く。

あの手が、故意に振るのでなくて自然に動くとするれば、何か動かそうとする無形のものが体に入っているのか、あるいは動くという先入意識によるものであるか、どちらでしょう。

私は絶対に「動かない」という意識が確かなれば、動くものではないと思うのですがいかがでしょう。

法主 では面白い話をきかせよう。

大倭の拜殿であったが、或る人が独りで盛んに霊動していた。十名ばかり参詣者が側にいた。これ等の人は各自各様の観察をしていた。中には心配そうに「先生、あのままでよろしいのですか」とか、「何神さん、降ってはるのや」「手がだるくならないのだからか」「気さえしっかりしていたら、絶対にあんなにならないと思う」と、口々に評していた。

中に孫を連れられた老婆がいたが、この人は極端に「私はあちこちの神さんに詣りますが、一度も手が動いたことはありません。よく連れの人がお

ウケを頂いたら神様が降って有り難いと言われるので、一生懸命合掌して行をしたこともありませんが、本当に動きません。動いている人はちょっと頭が変とちがいますか」と、自信ありげに経験談の一席であった。

このお婆さんの自論が面白かったので、ちよつと呼んで前に坐らせた。実験だから、動かないと心に抵抗して疑っておればよいと前置きして合掌させた。

ちよつと霊気で誘導すれば動き出した。それが物凄く、いくら止めようと頑張っても増々激しくなる。汗は額からポタポタと落ちる、孫は怖い怖いと大声で泣き騒ぐ。とうとうお婆さんも悲鳴を上げて「助けて下さい」と、どうなるかと案じて泣き出した。

この時の実況は今思い出しても吹き出したくなるほど、面白いやら気の毒やらで……すぐに霊波を切ればスウーと手も止まり普通の状態にもどつたので、一同やれやれといった表情で申し合わせたように爆笑はしばしば止まらなかった。

このような例はしばしばあることで、理屈より体験ですね。中には止まるころまでほつておけば、十二時間でも続けている者もある。が、これが筋肉の運動であれば非常に疲れるのであるけれども、実は体内の神経が運動を起こすから筋肉がそれに伴って運動を起こしているの、ちよつとも体には疲労を覚えぬ。無理のない自然の運動だからね。

どうもこの運動をやると、確かに健康になる。白血球が適当に増えるらしい。結核性などの病でも全快する率が多いようである。これは一応自分でも、心霊科学の一種として研究する必要があると思う。

漢字や送り仮名は、現代風に改めていきます。(続く)

こもれる魂魄の地を訪ねて(第33回)

秩父霊峰 武甲山への旅

'93・'94・'96年、そして'09年

京都府八幡市 林

修三

二〇〇九年三月十五日午前十時すぎ、私は岸田

哲さんと、岸田さんの呼びかけで参集された四人の方々(角田妙子・小笠原秀子・横井英夫・横井照美)と共に、埼玉県秩父市横瀬で、雨に煙る武甲山を前にして祈りを捧げていた。この山からは百年近くもの間に、セメント素材としての石灰岩が数億トンも採掘され続けている。この為に大きく山容を変えてしまった武甲山だが、武蔵国一的神奈備山は、降る雨と立ち昇る霧のペールにおおわれながらも、その気品は失われる事はなく、神秘的な美しさは、いや増すばかりであった。

私にとっては四度目にあたるこの日の秩父訪問の事の始まりは、今を去る十七年前の大倭大本宮の拝殿にさかのぼる。一九九二年夏、野草社主催の第12回野草塾が大倭の地で催された。二百数十名に及ぶ参加者の三泊四日に渡るイベントの準備と総合同会の大役を果たし終えた次の日の朝(八月四日)、私は安堵の心にまどろみながら、拝殿の階段上の板敷きの拭き掃除をしていた。その折、水俣の高倉敦子さんと矢追日聖法主が、私の側で話をされているのを聞くとはなしに拝聴していた。高倉さんの故郷である秩父の話となっていた。やがて法主が、名乗りをあげて出てきたが……。『秩父大善神』と、多少の驚きを含めて語っておられる姿が目に入った。そして何気なく立ち聞いたこの御縁をもって、翌年の秋、私は高倉さんと二人で秩父の霊峰「武甲山」と「三峯山」に登る事になったのであった。

その後、一九九六年六月、今度は私の呼びかけに応じて集まってくださった溝口省吾・邦子夫妻をはじめとする数人の方々、そしてその時も出口さんとお仲間等と御一緒に武甲山に登った。小雨降る中、鬱蒼たる樹々に囲まれた道を巡り、ようやく山頂下の御岳神社の社殿まで到り着くと、やがてバケツの水をひっくり返し続けた様な大雨となった。それでも意を決し雨を突いて、私達は何とか山頂に到着した。かつて山頂に存在したという盤座群は、石灰岩採掘の為にダイナマイトで破壊つくされ、山肌は削り採られていた。そして山頂のすぐ下は、何台もの工事用車両が行き来する採掘現場そのものであった。

それは悪夢の如く寒々とした風景であった。止まらない大雨の中で立ちつくしていた私達は、やがて皆で祈りを捧げた後、山頂にわずかに残されていた盤座の隙間に、大倭の法主様の奥津城からいただいてきた赤土を、各々の思いを胸に一人ずつ交代で播いた。やがて霊動し泣き出す方もあらわれた。私は泣けなかったが、重い念が胸に残った。

それから十三年の月日を経て、今回の秩父行きとなったのだが、秩父から帰った今も武甲山の事が頭から離れない。岸田さんに案内していただき東京を巡り、秩父へと向かった旅だった。今、この地球上で最も繁栄している場所の豊かさ、ありがたさ、危つさを味わい、到り着いた四回目的秩父。武甲山はその象徴として私の心の中にある。東京が顕幽の顕としてあらわれ、幽の世界として

見えた秩父、いずれも切り離してはあり得ない。秩父へ向かう為に私達が利用した鉄道、西武池袋線は、その顕界と幽界を繋ぐ一本の胎道のようにも見えた。她なる魂の世界と、現界を生きる子を結ぶ一本の絆の様に。かつて秩父にある三十四ヶ所の観音霊場や三峯の神々に救いを求めてやって来た多くの人々に安らぎを与えた土地は、やはり現在も、現界を生き、その豊かさに溺れ、あるいは弾き出された人々が、やがては到り着く新たな魂の救いの場所となりつつある事を、今回の旅で出会った人々を通して思った。

近代的繁栄の代償としての自然破壊、神への冒瀆は、ある一つの企業や団体の営利を目的にした暴挙に帰することは出来ない。それを営々として黙認し、文明の成果として享受してきた我々凡てが、その責任を負わなければならない事々である。もしそれが個々人において痛感できれば、我々は即、各々の立場で各々のやるべき行動をとる事だろう。高邁な理想や、遠い未来に逃げるのではなく、今自分の前にある事々の中で、すぐやるべき事を始めるだろう。必要なのは、人々との関係の中にあつてありのままの自分を知る努力、つまりは私自身の再教育であるにちがいない。

思えば私はこれまで、たくさんの嘘をついて生きてきた。目の前の事実にも目をつぶり、自分一人の身の安全と、心の安定を何よりも優先させて……。その間に、近代文明は進み、友達だった河や山や森、そこに生きる仲間達は静かに死んでいった。だが今も私の欲望はとどまる所を知らない。胸の哀しみは、やがて苦汁から冷たく硬い心へと変わっていく。私の心の砂漠化は、この星の砂漠化へと繋がっている様だ。

秩父霊峰武甲山。この山の歴史は近代の日本の歴史と重なる。古代人があたり前の如く感じとつ

ていた自然物よりの感応は、近代の人々の心には薄らぎ、やがて現代文明が齎す経済中心の生き方という魔力が、この美しき山の姿を大きく変える事になった。

しかし、秩父の地に立ち、この山を直に見ると、今もなお、その品位と圧倒的な力量を感じとる事が出来る。人間の業の前に蹂躪され続ける武甲山の沈黙は今なお守られ、人々のおおらかで、おだやかな心の復活を待ち続けている。いつの日かその前に、恥ずかしくない自分となって、もう一度立つてみたい。

こだまことだま

藤村卓司様へ

あじさい邑・岸野 春子

20年程前、菅原園の故柳生芳巳君の追悼文集を作ったりボランティア活動をしてきている人として、お会いしたことはなくお名前だけ知っていました。2年程前に、菅原園へ来た帰りだと言つて(まだ、続けていてくれたんですね)、菅原園から大倭印刷に席を移して18年にもなる私を訪ねて下さいました。常日頃、邑に自然が少なくなくなったと寂しく思っている私に、藤村さんの「気持ちの良い所ですね」「自然だけではだめ、そこに係わる人の心が大事」という言葉が心に残りました。その折には思いつかず(多分、お互いに控え目で)、先日、家の整理をしていたら、昔、頂いた手紙が出てきて住所が分かったので、『おやまと』を送らせてもらうことにします。 H21・3・3

岸野様へ 奈良県宇陀市榛原区赤埴 藤村 卓司

『おやまと』を読ませて頂きました。1月号には、僕の大切な友人である水俣の高倉敦子さんの文章が載っていて、読むことができてうれしか

つたです。

私の書いている通信類を同封します。農業も林業も、自分の思うように行くものではありませんが仕事しながら感じたことを発信しています。

林道開設工事が、この4月中旬より再開され、私が父から受け継いだ山も今年度中に崩されてしましますから、その前に一度山を見学に来てくれるとありがたいです。

今年の2月1日だったと思いますが、奈良県立文化会館横の道で、昇ちゃんとはったり会いまして。相変わらず紫陽花邑の一番の有名人だなあと元氣そうな顔を見て思いました。 H21・4・3

山と水と木通信より(要約抜粋)

その1

平成20年3月

宇陀市による林道・赤埴カトラ線の工事が、平成14年から総工費11億円の予定で進められていました。この工事は、1本の桜の古樹で有名となった佛隆寺と室生寺、そして2年前に完成した室生山上公園芸術の森を結んだ観光振興のための自動車道路を建設するのが第一の目的で計画され、補助金を得るために国の森林環境保全整備事業が利用されたものです。工事される山は摩尼山と呼ばれる信仰の山、山下には信仰の道である室生古道があり現在は室生寺へのハイキングコースです。

林道計画地に私の受け継いだ山林があります。宇陀市との話し合いにより、市に売却することにしましたが、山の自然環境に配慮することを全くしない工事が行われており、山を崩し搬出された土砂が川のそばに大量に積まれたため、少しの雨で川が濁り、川からの水を生活用水に使っていた里人は被害を受けています。まもなく私の耕作する水田の水源地の山へ工事が進みますので、お米作りににも大きな影響を与えます。

その2

平成21年1月

その1から8ヶ月経ちました。業者の談話が摘発されて、工事は遅れています。

林道予定地で伐採した手入れして90年育った杉の木は、枝払い、玉切り作業をしていて現在まだ山に寝かせたままです。そこへ作業を手伝ってくれた人も含めて19人を案内しました。でも木を購入して建築などに生かしてくれる人はいなかった。木を山から搬出して製材するのに大きな費用がかかるから使えないということでした。

近くには外国材専門の製材所があり、直径1mを越える丸太がたくさん積まれています。外国の丸太は海を渡って持ってくる事ができるので、近くの山の木を出して生かすことができないのはおかしいなと単純に思います。だから広い林道を山奥まで作り大型機械を導入すると言っただけで、急峻な山に囲まれたこの日本で化石燃料をたくさん使う大型機械を導入すれば山が痛みつけられるし、用材として木が使えるまでには百年という歳月が必要なのは変わらないですから、機械に頼ることだけで経済的に自立できるのか疑問です。今、国産材は十分安くなっているはずなのに使われていないし、大切にもされていない現実があり、そこを変えないと林業は生き返りません。

その3

平成21年4月

1月末、林道工事の入札が行われた。8月末までの工事予定と言う。この期間中には大雨によりがけ崩れ、土砂崩れの可能性があり災害が心配です。続けて9月頃にまた工事が始まり、私の所有林であった場所を崩し埋め立てて林道が全通されます。その後全線の舗装が行われます。

伐採した木について宇陀市森林組合に相談すると、林道が通れるようになった後、搬出は可能だが、伐採から2度の梅雨を越すことになるので市

場価値は低いと言う。しかし私は伐採にあたり新
月期の伐採と葉枯らしによる自然乾燥をしました
から材は良質であり、来年春までその質を保つて
くれると信じています。(参考文献『木とつきあ
う知恵』エルヴィン・トーマ著 地湧社刊)

日本の山のほとんどは今、杉やひのきの針葉樹
を植林して育てましたが、その後は手入れがされ
なくなり荒れ放題、中は真つ暗な死の山となりつ
つあります。鹿やいのしし、猿も山には安住でき
ず農村の田畑を荒らすようになり、その被害は赤
埴でも年々ひどくなっています。人間による行過
ぎた自然の改変と放棄が招いた結果と思われ、そ
れは都市住民の生活と無関係ではありません。

2月にNHKテレビで、「山の声を聞け 80歳
の林業家」が放送されました。大阪府千早赤坂村
の大橋慶三郎さんは、山をよく観察しその山に合
った林道をつける達人と呼ばれています。それに
よって搬出コストを下げ、山を生かす林業経営
をしておられます。

でも今、行われている国の補助金目当てで計画
され、鉄とコンクリートで山を征服しながら建設
されている林道は、山を殺す道だと私は思います。

交差点11

ある在日韓国人3世の 思うところ

FIWC関西委員会 金宇大 (京大)

保育園から幼稚園に移ったとき、僕の
名前は、「いなだつだい」から「きむつだい」に
変わった。父が、通名の「稲田」でなく、本名の
「金」を苗字として使うという方針に変えたから
だ。

当時、在日韓国人の子供が学校でいじめられる
という事例が頻発していた。そのため、母はかな

り強く反対したらしい。しかし父は信念を通し、
母を押し切った。実家の近くには民族学校もあつ
たのだが、僕はそこへは行かず、日本の学校に
「金宇大」として通うことになった。幸い、学年
で一番体が大きかった僕は、いじめにあうような
ことはなかった。小・中・高と「金」の苗字を名
乗ってきた僕は、自分が「日本人」ではなく、
「韓国人」なのだという自覚を強くもつようにな
っていた。

大学に入ると、「在日本朝鮮留學生同盟」とい
う学生団体から声がかかった。成り行きで顔を出
し始めたが、民族学校出身者が大半を占める「留
学同」のメンバーと温度差を感じるようになった。
彼らは「ウリハッキョ(=民族学校)」に通い、
在日という集団の中で生きてきた。僕は、金とい
う名を名乗ってきたが、実際は一人で在日韓国人
をやってきた。1年ほど顔を出し、それから行か
なくなつた。

大学3年のとき、韓国に1年間、語学留学した。
父が「自分のルーツを知るために、行ってきたら
どうか」と勧めたからだ。考古学を志していた僕
は、自らのルーツ云々ということよりも、韓国語
がわかれば自分の専攻に有利だろうという考えか
ら、二つ返事で留学を決めた。

留学先では、自身の認識と現実とのギャップに
否応なく当惑させられることとなった。なにより、
韓国語が話せないという事実が圧倒的であった。
自分は日本人ではないと思う。しかし自分の母国
語はまぎれもなく日本語なのである。

韓国人のナショナルリズムにもなじめなかった。
僕が韓国に行った2005年3月、島根県が「竹
島条令」を公布したことでソウルは反日ムードに
包まれていた。街中に「独島(=竹島)は我々の
領土」のスローガンがあふれ、マスコミはこぞつ

て日本を罵っていた。

留学を終える数日前、軍隊入りを2週間後に控
えた韓国人の友達と言った。「ウデ(=宇大)は
軍隊行かなくていいんだよな、うらやましいよ」
ああ、と思った。自分は「韓国人」ではないのだ
なあ、と。

では自分は「日本人」なのか。違う。いまさら
日本人であるとは到底思えない。しかし、「韓国人」
ではない。では「在日」か。それもなにか違
う。僕は集団としての「在日」を知らない。

去年の春、父が突然「家族みんなで帰化しよう
と思うが、お前どうする」と聞いてきた。妹が就
職活動の年を迎えるのにあわせて、以前から考え
ていた「帰化」を実行しようというのだ。

韓国に行く前、僕は自分が「韓国籍」であるこ
とに、それなりにこだわりをもっていた。国籍は、
守っていくべき自らのアイデンティティであると
考えていた。

韓国にいたとき、友人たちはみな、僕が在日韓
国人であると知るや「パンガウオヨ(=うれしい
です)」と言った。しかし、僕が韓国籍のパスポー
トをみせると、彼らは例外なく驚くのだ。「えっ、
ウデ、国籍も韓国なの?」

今年1月、僕の名前は法律上「金宇大」から
「稲田宇大」へと戻った。しかし僕は、これから
もできる限り「金宇大(きむつだい)」を使つて
いきたいと思つている。苗字が韓国語読み、名前
は日本語読み、それが一番しっくりくる気がする。
2005年の11月、韓国にミニキャンピングにきて
いたFIWCのメンバーとたまたま出会い、それ
が縁でこの大倭にある交流の家によくよく足を
運んでいる。FIWCの人たちは、僕のことを
「ウデ」と呼んでくれる。それこそがほかでもな
い、僕のアイデンティティではないかと思つた。

寸 莎

第84回

辻 本 賢 司さん



生きている不思議

今回登場してもらうのは、大倭殖産株式会社

の営業部課長補佐の辻本賢司さん。活力のある眼光が印象的な人である。ゆっくり話してみても、独特な感性の持主であることを発見して話しに引き込まれた。特に、「生きていることのおもしろさ」を深く味わっている感覚は新鮮だった。

辻本さんは昭和四十年十月二十八日に東大阪で二人兄妹の長男として生まれたが、幼児期に大和郡山市に移り、それ以来ずっと奈良盆地に住んでいる。父親は運送業に従事していたが、祖父と共に米作りもしていた。「中学一年までは体が小さくて、走るの速かったが、落ち着きがなく、勉強も嫌いだ。水洗便所があるような『文化生活』で暮らしている団地の子供たちにコンプレックスを感じて、下肥の入っている野ツ

ボにはめていじめたりしていた」と矢田小学校時代のことを振り返って、いたずらっぽく笑う。

郡山西中学校から奈良工業高等学校建築科に進学。「あい変らず勉強は二ガ手だったが、中学時代から本を読むのは好きで、星新一のSFや夏目漱石の小説や『三国志』など、手当たりしだい乱読した」という本好きで、それは今も続いている。

高校時代には、「女の子とかお洒落とかにはあまり興味を持たず、オートバイが好きで、二五〇CCの単車に乗って荒地を走りまわるモトクロスにはまって、競技会にも出たりしていた」。その趣味は、昭和五九年五月に大倭殖産に就職しても二年ばかり続き、「数え切れないほど転倒し、骨折も二回ほどした」というからハンパではない。

入社して最初の現場は富雄高校の校舎の新築工事だった。その後も数

多くの現場を経験する中で、「現場監督というのは、作曲家の思いを現実化していくオーケストラの指揮者のようなもので、メンバ―の持ち味をきちんと引き出し、それぞれの課題に応じて機転をきかせて対処していく能力がないとうまくいかない」と思うようになった。自分自身に関しては、「出しゃばるところはあるけれど、マイペースのところもあり、先頭に立つて引っぱるタイプではない」と自己分析する。

入社四年目の昭和六三年には、はじめ一人で現場をまかされて、東京での病院改修工事やマンション新築工事に取り組んでいる。

「勉強は嫌いだ」と思っていたが、二級建築士と一級建築士の資格取得試験には、「現場での経験も生きて、乾いたスポンジが水を吸い込むように勉強できて」、最短の期間で合格している。

結婚したのは平成八年のことで、夫人とは、「花見で知り合った仲」だという。現在、中学一年の長男と小学五年の長女と幼稚園児の二女と、三人の子室に恵まれている。

冒頭に書いた「生きていくことのおもしろさ」ということだが、奥さんの流産、子供や自分自身の怪我、お客さんとの偶然の出会いなどの経験を通して、「すべてにご縁があり、

緊密につながり合っている不思議」を実感するようになった。

「大倭殖産で働くようになったのも不思議なご縁だし、大げさに言うようだけれど、この地球の上にごうして生きていること自体が、奇跡的で不思議なご縁だし、そう考えると色んなことが新鮮に思われてくる」と辻本さんは淡々と語る。

人に無茶を言われて少し腹を立てても、「地球的な規模から考えればささいなこと」だと思えて、それ以上を立てることはないのだという。だから、「特に嫌いと思う人もない」。

将来の夢はと問うと、「最終的にはハワイで暮らすこと」という意外な答えが返ってきた。ハワイというのは「南国の楽園」というイメージで、沖縄とか南太平洋の島でもいいのだという。その最終目標を実現するために、お金を貯めたりして着々と準備していくつもりだと嬉しそうに語ってくれた。

大倭に期待することは何かと聞いてみると、しばらく考えてから、「若い人達ももっと頭角を現わして、活気ある場にしてほしい」と答えてくれた。

辻本さんの血液型はO型、好きな色は南の楽園のマリンブルー。

(聞き手 岸田哲)

あじさい日誌

々の姿、また現役の邑人の幼
年・青年・壮年時代を無声の映
像ですが賑やかに見ました。



4月11日 午前10時半から奈良
パークホテルにて邑交会。
4月12日 裸会。
4月15日 大倭神宮で筋負祭
(月次祭)が行われました。
4月18日 夜、交流の家でF I
WC定例委員会。
4月19日 第301回大倭会主
催文化行事として午後2時から
拝殿において、昭和36、38年頃
の紫陽花邑の生活記録のDVD
を鑑賞しました(始めはモノク
ロで途中からはカラー)。参加
者30名余り。奇しくもこの日は
鈴月かあさんのご命日でした
が、元気な若き日の鈴月かあさ
ん、他にも故人となっている方

4月22日 夜8時から教務本庁
において本紙編集会議中、食用
蛙の鳴き声、今年初めて。
4月23日 大倭大本宮月次祭。

第303回 大倭会文化行事 大阪府立弥生文化博物館 —2000年前の巨大高床式建物の出現—

日時：平成21年6月21日(日) 小雨決行
集合：JR阪和線・信太山駅
改札出口 13時35分
交通：近鉄学園前発快速12時4分に乗り
12時25分鶴橋着、JR環状線外回
りに乗り換え天王寺へ、阪和線快
速13時9分和歌山行きに乗り13時
25分に鳳駅着、13時27分発普通に
乗り換え13時32分に信太山着
ルート：駅から徒歩で博物館 ⇨ 池上曽根
遺跡公園へ
注意：昼食は各自で済ませて集合
問合せ：湯浅芳郎 090-6987-5847

この日は昭和38年4月8日須佐
緒祭の法話をお聞きしました。
4月25日 木津川カントリー倶
楽部で第12回大倭会ゴルフコン
ペ。生憎の荒天でしたが奮戦し
た後、懇親会で交流を深めまし
た。
5月2日 西斎庭で夕方6時か
ら邑の主婦達の思いつきで、神
事とは関係のない(こがミノ)
「パーベキューパーティ」が開
かれました。楽しく盛り上がり
て恒例にしようやとの声も。
5月3日 連休！昇ちゃん荒
れ模様。青山法義さんが自分も
見たいからと映画「レッドクリ
フ」に連れ出してくれました。
5月6日 大倭神宮月次祭。
夜、大倭会館で邑倭の会。
5月9日 大倭神宮に、今年も
アオバズクが来ているのを確認
したそうです。
5月10日 裸会。かねて療養中
の大倭会会長中西正和さんが思
いを一杯持って久しぶりに参
加、また来邑中の元邑人矢部顕
さん(岡山市)が飛び入り参加
されました。
大倭安宿苑では
5月10日 成謙坊さんへお参り
の後、茂毛路園あじさいホール
で法人成立53周年記念式典。続
いて法人では永年勤続者を囲ん
で祝賀会、各施設でもお祝いの
会食が行われました。
(菅原園)
4月18日 春祭り。家族も参加

琴やお茶会で交流しました。
(須加宮寮)
4月19日 奈良県障害者スポー
ツ大会の卓球に往死者3名が参
加、1名が優勝しました。
(長管根寮)
4月20日 (デイサービス)プ
チ外出で、2名がデザート食へ
放題のお店に行きました。
5月4日 書道。季節にちなん
だ文字を書きました。
(茂毛路園)
5月5日 「端午の節句」、子
供にかえてレクリエーション
を行いました。2階ではユニッ
ト対抗輪投げ大会、3階ではこ
いのぼり釣りゲーム、4階では
ボウリング大会。
(八重垣園)
投句箱より「おいし日も皆健や
かに柏餅」「童心に戻りて唄う
鯉のぼり」
[俳句の風物] 上田森彦(99歳)
クローバに青年ならぬ寝形残
す 西東三鬼
緑の絨毯を敷
きつめたような
クローバー。の
びのび寝転べば
五月の青空。身
も心も若やいだ
が、残る我が寝
型は……。
教科書にク
ローバ挿みし
記憶もつ
森彦

田んぼ通信
田植えの indoors
今年も田植えの季節となりました。
無農薬、EM農法で米づくりをして12年
目です。どうぞふるってご参加下さい。

6月7日(日) 
午前 **9:00~** (雨天決行)
*泥で汚れてもいい服装で。
(着替え、タオル各自で準備)
軍手・軍足は用意します。
*昼食・飲み物は用意します。
(持込み歓迎)
連絡先：玄徳院
TEL 0742-41-4615

* 月次祭(大倭神宮)
6月6日(土) 午後2時より大
倭神宮にて。
* 大倭会主催第四八五回裸会
6月14日(日) 午後2時より大
倭大本宮拝殿にて。
裸(みそぎ)とは、自己本霊を
覆っている枉罪を被り加美のお
徳を戴くこと。「つみそぎ」と
「みいずそそぎ」という言葉が一
体となってきた大和言葉。
裸には、知恵の研鑽によって
表面から枉罪を除く方法と本
心、本霊の動きによって内側か
ら除く方法とがある。6月と12
月は大袈裟の月。
* 月次祭(大倭神宮)
6月15日(月) 午後2時より大
倭神宮にて。
* 月次祭(大本宮)
6月23日(火) 午後2時より大
倭大本宮拝殿にて。

あんない